



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかは
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

大学院映像研究科 映画専攻

Graduate School of film and New Media,
Department of Film Production

研究室探訪

第七回

Visiting the Laboratory

大学院映像研究科は、二〇〇五(平成十七)年に設置された学部を持たない独立研究科である。修士課程は「映画」「メディア映像」「アニメーション」の三つの専攻に分けられ、修士号既得者およびそれに相当する学識経験を対象とした博士後期課程「映像メディア学専攻」も設けられている。今回取材した映画専攻は、「監督」「脚本」「プロデュース」「撮影照明」「美術」「サウンドデザイン」「編集」の七つの領域(コース)からなる。これは商業映画における職能区分とほぼ同じで、映画専攻に入学することにより、プロの現場と同様の映画制作プロセスを学習できるようになっている。

映像研究科の特長のひとつに、神奈川県横浜市を拠点としていることがある。馬車道校舎、万国橋校舎、新港校舎という三ヶ所に展開し、映画専攻は馬車道校舎を中心に活動する。しかし今回の取材の際には、修了作品の撮影が行われている新港校舎を訪ねた。スタジオにはセットが組まれ、多くの学生がスタッフとして参加。監督領域の松井一生さん(修士三年)の修了制作『ユラメク(仮)』の撮影現場だ。映画専攻では、短編から長編まで年間数本の作品を制作し、その費用は規模に応じて実習費として用意される。さらに施設・機材・備品もプロが使用しているものと同等クラスのものである。

松井さんは映像研究科映画専攻に進んだ理由を「修了生が撮った作品を観て高レベルだったこともあり、教授陣も魅力的でした。予算や機材など、本格的な映画をつくる態勢が得られることも大きかった」と語る。授業においては「黒沢先生の

指導を批判的に捉えながら、自分の世界を
進歩させていくことができたと思います」と
振り返る。

この日、撮影現場を見守っていた美術領
域の磯見俊裕教授は、『ワンダフルライフ』
(是枝裕和監督)、『バトル・ロワイアルII
鎮魂歌』(深作欣二・深作健太監督)、『殞の
森』(河瀬直美監督)、『ぐるりのこと。』(橋口
亮輔監督)など映画美術担当として多くの
作品を手がけてきた。撮影中の『ユラメク
(仮)』で美術監督を務める美術領域の谷本
佳菜子さん(修士二年)も磯見ゼミ生で、こ
の作品が修了制作になる。谷本さんによる
と「アニメーションのサウンドデザインを
学びたいと思って神戸芸術工科大学に進学
しました。そこに磯見先生が教えにきたこ
とがあり、美術を専門にやりたいと思うよ
うになった。映画美術にかんして理論はも
ちろんですけど、実践的な課題を何本もつ
くることで、自由かつ主体的に考えていく
ことを覚えることができました」とのこと。

磯見教授も「映像美術とは監督が考え
ていることを一緒に具現化するのが大きな
仕事です。私がかかわった映画を観てもら
いながら、脚本からどういふふうセット
を導き出していったかを知ってもらおう。タ
イミングにもよりますが学校にセットを
持つてきて、実習として制作することもあ
ります」と言う。さらに映画専攻について
は「プロの仕事の仕方、現場での進め方を
具体的に学んでもらいたいです。撮影現場
が整理され効率的に作業を進めることがで
きるといったことも、プロの世界と学生の
世界の大きな違いです。プロの現場の緊張
感を体感し、少しでも早く身につけてもら
いたいものです」と語ってくれた。



撮影したばかりの映像を確認する松井一生さん(監督領域修士2年)と現場を見守る美術領域の磯見俊裕教授。